Japanese Association for Estuarine Science (JAES)

汽水域研究会 NEWS LETTER

2020.8.15
21号

例会参加報告

汽水域研究会第8回例会（松江）

暖冬の影響で、雪の気配がまったくない島根大学にて、2020年1月11日（土）～12日（日）の2日間にわたって、汽水域研究会第8回例会が、 島根大学エスチュアリー研究センター 第27回汽水域研究発表会との合同で開催されました。齋藤文紀教授（エスチュアリー研究センター長）による開会の挨拶後、多岐にわたる研究発表と活発な議論が行われました。

研究発表は、11日には、常設セッション「水圏生態Ⅰ・Ⅱ」11件、「汽水域一般」5件、「環境変動解析」4件、「流動解析」3件の発表が、翌12日には、シンポジウム「シミュレーションを用いたエスチュアリーの理解とその応用」と、スペシャルセッション「完新世における汽水域及びその周辺地域の環境変遷史 2020」がそれぞれ開催されました。両日とも、盛りだくさんの内容であり、のべ参加者は、182名（11日109名、12日73名）におよびました。

恒例となった、優秀な学生発表者へ授与される「汽水域研究会長賞」「エスチュアリー研究センター長賞」の審査も行われました。日々の研究のみならず、発表の練習も陰ながら重ねてきた学生による発表の内容や方法などの質の向上が、年々目に見えてわかるようになってきました。そのせいもあって、多くの聴講者が評価者として熱心に聞き入る機会となっていました。

三瓶良和教授（汽水域研究会会長）による閉会の挨拶では、例年にも増して、分野を超えた様々な発表や意見交換がみられ、本会における、学問のすそ野の広がりが感じられたと総括されました。たしかに、汽水域研究を先頭立って推進してきた大御所の先生から、卒業・修了研究として研究を展開してきたフレッシュな学生までの様々な発表によって、汽水域を軸とした各分野における研究の現在地と、今後の検討課題などを知る機会にもなりました。また、地域創成につながる汽水域研究に対する、一般市民の方々の期待の大きさを改めて実感させられました。

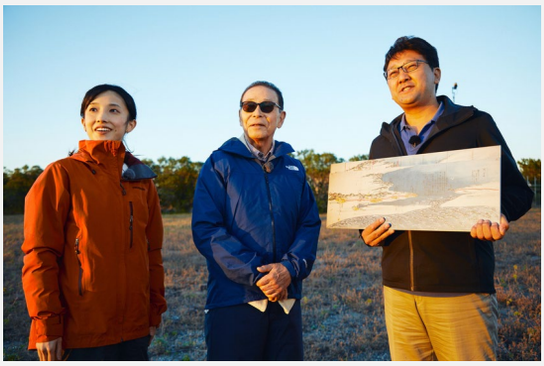
齋藤文紀エスチュアリー研究センター長による開会挨拶

三瓶良和汽水域研究会長による閉会挨拶

（汽水域研究会情報幹事　山田和芳）
（写真：エスチュアリー研究センター　金相曄）

特集記事

ブラタモリ「浜名湖～ウナギといえば浜名湖なのはなぜ？～」への番組協力



放映された番組「ブラタモリ」の一場面
（提供：NHK）

大草山から望む浜名湖の遠景
（提供：浜松・浜名湖ツーリズムビューロー）

弁天島の赤鳥居　奥に今切口を望む

昭和50年ごろのうなぎの出荷風景
（提供：浜名湖漁業協同組合）

「汽水」と伝えたところ、「喫水」「気水」、はたまた「生粋」のように間違った漢字として返信いただくことが少なくありません。まだまだ世間には「汽水」という言葉も、ましてやそのイメージも深く浸透していないことを感じることがあります。

そんな中、国民の6人に1人は視聴しているオバケ番組で、「汽水」にまつわる一つのストーリーが紹介されました。その番組は「ブラタモリ」。ご存知の方も多いが、ブラタモリは、2008年からNHK総合テレビで断続的に放映されている人気番組です。地形・岩石マニアで街歩きを趣味にするタモリさんが、案内人に扮した専門家のお題に答えていきながら、街の変化のいきさつを空想・推測し、そのエピソードを探っていく“探検・散歩番組”です。一般の方にとっては、地形や地質が歴史や街づくりにつながっていることを知るきっかけとなります。そのため、専門家や研究者にとっては、極上のアウトリーチやサイエンスコミュニケーションという位置づけで、大きな役割を果たすものと期待されています。

2020年1月18日に放映された回では静岡県浜名湖が舞台となり、 ウナギといえば浜名湖なのはなぜ？というテーマで、進行されました。これまで、ブラタモリが取り上げた湖沼は、十和田湖と洞爺湖のみで、どれも火山に起因するものでした。今回、はじめて、海跡湖・汽水湖という区分の湖沼として、浜名湖が登場したのです。

番組では、ウナギ養殖の歴史をストーリーの軸にして、浜名湖の特徴・成り立ち、天竜川がつくった三方原台地と伏流水の存在、シラスウナギの誕生と黒潮を使った3000キロの旅、ゆりかごの場としての浜名湖の役割、浜堤列の地形高低差を巧みに利用した土地利用、物流や広告塔としてのうなぎステーションとなった東海道本線舞阪駅などをめぐっていきます。

「縄文海進」「海跡湖」「汽水」「浜堤」「砂州」などの汽水域環境には欠かせない専門用語が、タモリさんの口から次々に飛び出していきます。

そして、すべてのはじまりの場所に最後にたどり着きます。そこは、今切口。1498年の明応地震津波によって砂州が破壊されたことで、外洋とつながり、海水が遡上する場所。今の浜名湖の姿を象徴する、まさしく“すべてのはじまり”の場所です。「当時、津波災害を受けた方には申し訳ないけど、浜名湖が汽水湖になったことで、生物相が豊富になって、シラスウナギもたどり着き、一大養殖産業が発展した」と、タモリさんの感想で番組は締めくくられます。

番組の企画から収録・放映までは、約1年間の長い時間でした。それは、「先生。ウナギと浜名湖の地形は結び付きますか？」と、番組ディレクターの突拍子もない一本の電話からはじまりました。ストーリーづくりから、社内コンペ、ロケハン、撮影、CG内容監修

（次ページに続く）

特集記事（続き）

までの決して軽くないプレッシャーの中、長い時間拘束されました。それでも、少しでも「汽水域」のことが一般の方に伝わればという思い一心でした。多くの方々が「汽水域」の理解につながる一助となっていれば幸いです。

汽水域の環境は、地域の特産に結び付きやすいです。その一方、バランスが崩れやすい場でもあります。浜名湖のウナギに関しても、シラスウナギが国際自然保護連合（IUCN）の絶滅危惧種になっている種であり、採集と保全の両立を考える必要性があります。また、養殖池が大規模ソーラーパネルに転化され、景観が損なわれることを危惧する声もあります。抗うことができない移ろう自然環境があり、その上に私たちの社会経済が立脚する理解や認識を持ち続ける必要があるのではと感じています。

さて、撮影の合間に、タモリさんに浜名湖のイメージをお聞きしたところ、浜名湖の内陸側に来たのははじめてだったということと、浜名湖産のドウマンガニ（ノコギリガザミ）が非常においしく、また食べたいということでした。

ソーラーパネルが設置されている
かつての養鰻池（静岡県湖西市新居町）

（汽水域研究会情報幹事　山田和芳）

第12回大会案内

重要なお知らせ　汽水域研究会　2020年（第12回）大会のご案内

汽水域研究会2020年（第12回）大会は、今秋に佐賀大学での開催を計画しておりましたが、新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点から、ビデオ録画の基調講演および、オンラインポスター発表会へと形式を変更いたします。また、総会の開催についても、現在検討中です。

詳しくは、決定次第、汽水域研究会ホームページおよびメーリングリストにてお知らせいたします。皆様方におかれましても格別の注意を払いながら、感染予防に十分ご留意いただきますようお願いいたします。

（汽水域研究会事務局長　瀬戸浩二）

情報

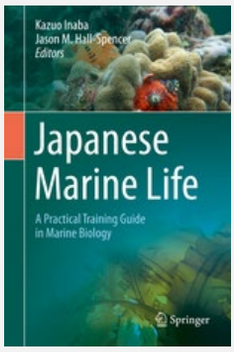
● 関連学会の2020年度大会

新型コロナウィルス感染症拡大のため、多くの学会大会・研究会が中止・延期となっています。一部の学会等ではオンライン上で代替企画を実施している場合もあります。詳しくは、各学会等HPを参照ください。

日本陸水学会 第85回大会（東京）延期
日程：~~2020年9月19日（土）～9月22日（火）~~
場所：~~東京農工大学府中キャンパスほか~~

日本地質学会第127年学術大会（名古屋）中止
日程：~~2020年9月9日（金）～9月11日（日）~~
場所：~~名古屋大学東山キャンパス~~

おすすめ書籍



K. Inaba and J. M. Hall-Spencer編（2020）
Japanese Marine Life - A Practical Training Guide in Marine Biology

海洋生物学に関する書籍がSpringerより出版されました。本書は日本の多様な海産動植物相について概観した上で、Cell and DevelopmentalBiologyやMarine Zoology、Marine Ecology等の分野で用いられる様々な調査手法などについて具体的に紹介したものです。

英語で書かれた本書は日本の大学に留学している学生を対象とした臨海実習や海外研究機関からの実習受け入れの際などにテキストとして使用でき、また、同様の海産動植物相を有するアジア諸国の研究者に有益な情報を与えるものでもあります。ぜひご活用ください。

例会報告

汽水域研究会第8回例会（合同研究発表会）会長賞

汽水域研究会では、優秀な若手人材の育成と学生の研究意欲向上を目的として、「汽水域研究会会長賞」と「エスチュアリー研究センター長賞」を優秀な発表を行った学生に授与しています。これは、例会参加者の投票により、決定されます。第8回例会において「汽水域研究会会長賞」を受賞したのは島根大学自然科学研究科の赤對紘彰さん、同研究科の右藤周悟さんの2名。「エスチュアリー研究センター長賞」を受賞したのは、島根大学自然科学研究科の石山侑樹さん、同大生物資源科学部の安永志織さんの2名でした。受賞されたみなさま、おめでとうございます！

★汽水域研究会会長賞

赤對紘彰さん　島根大学大学院 自然科学研究科

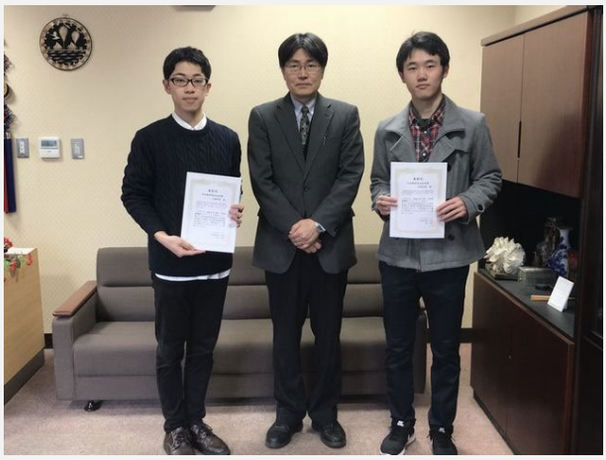
「南極宗谷海岸の親子池における完新世貝形虫群集の時間的変化（赤對紘彰・入月俊明・瀬戸浩二・香月興太）」

（受賞コメント）“専門外の人に分かり易く説明することを心掛けました。社会人になってもこの経験を活かします。”

右藤周悟さん　島根大学大学院 自然科学研究科

「過去約3400年の対馬舟志湾における植生と気候変動（右藤周悟・渡辺正巳・入月俊明・藤原勇樹・瀬戸浩二・香月興太・Jin-Young Lee・Jaesoo Lim）」

“今回得た研究の成果と課題をより深め、納得のいくかたちを目指します。”



汽水域研究会会長賞を受賞した
右藤さん（左）と赤對さん（右）
中央は汽水域研究会会長の三瓶教授

★エスチュアリー研究センター長賞

石山侑樹さん　島根大学大学院 自然科学研究科

「稚エビ期の加温および低塩分飼育がヨシエビの成長・生残に及ぼす影響の検討（石山侑樹・山口啓子・勢村均）」

“ヨシエビを松江の皆さんの食卓に飾れるように研究を進めます。”

安永志織さん　島根大学 生物資源科学部

「中海の異なる環境条件におけるオゴノリ類の現存量と生長量（安永志織・倉田健悟・南憲吏・須崎萌実・藤井貴敏・渡部敏樹）」

“研究の過程で自分の弱みが分かりました。新年度は社会人になるのでこの経験を踏まえます。”

エスチュアリー研究センター長賞を受賞した
石山さん（左）と安永さん（右）
中央はセンター長の齋藤教授

（汽水域研究会情報幹事　山田和芳）（写真：エスチュアリー研究センター　舩來桂子）

会員数（2020年8月15日）

正会員：82名（ ±0 ）、賛助会員：5名（ ±0 ）、
学生会員：41名（ ±0 ）、計：128名
#2019年12月31日からの増減

編集後記

新型コロナウィルス感染症拡大をうけて、何の変哲もない日常こそが幸せであったと感じます。ポストコロナにおける研究会の在り方をつくっていきたいと思っています。（山）

汽水域研究会ニュースレター第21号　2020年8月15日発行　編集・発行：汽水域研究会
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060島根大学エスチュアリー研究センター内 汽水域研究会事務局
office.rgbwa@gmail.com　0852-32-6450 (phone&fax)